それなりに上手くいっていた人生でした。

怠けMONO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それなりに上手くいっていた人生でした。

【Ｎコード】
Ｎ１１５９Ｙ

【作者名】
怠けＭＯＮＯ

【あらすじ】
目を覚ますと、そこには男の娘がいました。
それなりに満足していた人生をやり直すことになった主人公が、新しい人生を楽しく過ごそうと頑張ります。
＊原作を知らずに、衝動的に書き始めた駄文です。

第一話（前書き）

どうも初めまして、駄文ですがよろしくお願いします。

第一話

それなりに上手くいっていた人生でした。

わりと勉強ができ、平均より高い運動能力をもち、多くの友達ができ、楽しい人生でした。

大学に進学し、やっと明日から２０歳になると感傷に浸りながら眠りについたはずでした。

・・・ここはどこですか？

目を覚ますと、体は動かない、頭は熱くて痛い、声は出ない、ないない尽くしでした。

それでもあまりの辛さにジタバタしていると、扉の開く音と誰かの足音が聞こえました。

音のした方を霞んだ視界に収めると、そこには長い黒髪の美人らしき人が見えました。

あなたは？と声を発しようにも声が出ず、近寄ってきた人に抱きかかえられると疑問に思ったことがあります。

抱きかかえられる？

２０にもなる大人が？

そんな疑問を余所に、その女性は私を抱きかかえるなり車に乗せ、近くの病院へと直行し、私は流されるまま待合室に座り、お医者様に見てもらい、薬をもらって再び家に帰って、寝かせられました。

その間、女性は私に向かって「大丈夫？」「どこが悪いか言える？」など心配そうに尋ねてきましたが、私の熟練のその場に合わせて流す技術により問題ありませんでした。

その後、お粥を食べさせてもらい、薬を飲んで寝てしまいました。

次の日、カーテンの隙間から日差しが差し込み、スズメが鳴いており、まさに絵に描いたようないい天気だなぁと思いながら目を覚ましました。

薬が効いたようで随分楽になり、周りのことをきちんと認識できるようになりました。

私はふと目についた鏡を這いつくばって取って見ると、そこには白髪が肩ぐらいにまで伸びた目の赤い男の娘が映っていました。

・・・誰やねん

いやぁ、どうやら私はまだ夢の中のようです。

えぇ、あんな男の娘なんているはずがない。まして自分は自他ともに認める三枚目でしたので、そんなはずがあってたまるものか！

こういう時はお約束通り、寝れば夢から覚めるのです！

ほっぺは抓りませんよ。現実逃避ではないのです！

これは戦略的撤退なのです！　↑？

しかし、あんなのが実際にいたらホルモンバランスが相当崩壊しているんでしょうね、あはははは～。

と再びベッドに入り、目を覚まそうとした時、部屋の外から足音が近づいてきました。その誰かは部屋の扉を開けるなり、

「緋音（あかね）大丈夫？」

「緋音（あかね）生きてるか？」

とこちらに尋ねてきました。

えぇい！邪魔するでないわぁー！

私は大人へと変身する（２０歳になる）ために起きるんじゃー！

心の中でシャウトしながら、もう一度寝ようと試みました。

「起きられるようになったか？」
「よかった、昨日急に熱を出したから心配したのよ？せっかくの３歳の誕生日だったのに、残念ね。」

へぇー、そうなんですか。それじゃ、って乱暴に撫でないで下さいよ！痛いじゃないですか！
そんな態度が顔にでていたのか男の方は苦笑しながら手を引込め、女性と一緒に部屋を出ていこうとします。

「じゃあ、後でお粥とお薬持ってくるわね。」

はいはいわかりましたよ、お母様～。

そして、二人が部屋から出ていき、扉が閉まると私は天井を仰ぎ、理解してしまったために自然とため息を吐いてしまいました。

現実か・・・・ｏｒｚ

第一話（後書き）

ありがとうございました。

第二話

どうも！白峰緋音でッス！

いやぁ～あれからは大変でしたよ。

（認めたくない）現状理解から始まり、この体に残っていた記憶を思い出しながら、日々を何とか過ごしてきましたよ。

アルビノというハンデを抱えていましたが、そこは元大人の精神のため、物静かに読書を嗜んでいました。

外に出るときは、サングラスをかけ、日傘を差し、肌を出さないようにしたりするのは大変でしたが特に問題はありませんでした。

両親が悪ふざけでゴスロリの女装を強制したり、知り合いを呼んで撮影会を始めたり、外に出たとき男の子に男女とからかわれて、両親が切れた上にその子の親まで怒り出し、なぜか私がその子を弁護する羽目になったり―（その子とは親友になりました）・・・・・・

問題はありませんでした！

でも、不思議の塊みたいな私が言うのもなんですが、日本ってこんなに不思議なとこでしたっけ？

ドでかい西洋を思わせる町に始まり、あっちこっちを見れば髪の色がレッド、ピンク、ブルー、ブラウン・・・・・・

さらには、あっという間に絡んできた不良を鎮圧するダンディー―

（ですめがね？とか恐れられていました）がいるわ、コンビニの近くで古い制服をきた何だか生気の薄そうな女の子を見かけたり、ギネスをはるかに超えるであろうでっかい木（ばんとうとかいうらしいです）に図書館島とかあったりと前世―（？）とのあまりの違いに自分が変なのかと悩んだりもしました。

そこで色々と気心の知れた心友―（レベルアップ！）に話してみると、顔が笑っているのですが、微妙に汗をかいた表情で、

「だ、大丈夫だよ！」

と何が大丈夫なのか全く分かりませんでしたが、その必死さに免じて今回は見逃してあげましょう。

・・・そのため息は何ですか？

第二話（後書き）

ありがとうございました。

第三話

私も今日から小学生！

そして、今日は入学式！

小っちゃい子が溢れかえり、泣き喚き、先生方が大きな声でなんとかまとめようとしていますが・・・・

うん、カオスですね！

この中に混じっていかなきゃと思うとため息がでそうですが我慢我慢。

すると隣からため息が聞こえてきました。

おやおや、そんな人生に疲れたおっさんがするようなため息をするのはどこの誰ぞ？と興味を持ってそちらを見ますと、そこには・・・・

人生に疲れた雰囲気の美幼女がおりました。

すごいですね、傍から見ていてすぐわかるくらい疲れていますよこの幼女。

眼鏡をかけており、長い赤髪を後ろで括り、これから入学する麻帆良小学校の制服に身に着けた幼女は、どんよりって表現が相応しいくらい沈んでいました。

そのまま観察していると、その幼女がこちらの視線に気づきました。

「何だよ、人のことじろじろ見て？」

おおっと、なんかピリピリしてますよこの幼女。

とりあえず、あたりさわりのない挨拶でもしましょう。

いや～、初めまして。こんにちは。隣から妙に疲れたため息が聞こえたもんで、気になっちゃったんです～。

「誰が幼女だ！って、そんなことより、わ、私って変なのか？」

あれ？なんか怒った上に、ビクビクしだしちゃいましたよ？

これは不味い！

何が不味いって私は体は男の娘ですが、精神は元大人！　↑重要

そう、つまり私は紳士（笑）！紳士（笑）であるべきなのです！

いやいや、何をおっしゃいますかウサギさん。あなたのような美幼女は中々いませんよ？（あれ？そういやこの土地美人多くね？）もっと自分に自信を持ってください。ね？（サングラスを外して、スマイル～♪）

「あ、ああ。ありがとう・・・／／／」

ふう、どうやらごまかせたようですね。なんか顔がちょっと赤くなっちゃいましたけど、周りの男子も何人か赤くなってますけど、無問題！

「な、なぁ、よかったら式の後で話しないか？」

もちろんですとも！あ、でも私の友達も一緒でいいですか？今いませんけど、後で合流するんです。

「ん・・・、まぁ、いいよ・・・」

よし、ちょっと不安そうですが大丈夫でしょう。さて、式も始まるようですし、きちんと座っていましょう！

さすがに、ぬらりひょんが実在したのには驚きを隠せませんでした。

後、幼女に懐かれました。

第三話（後書き）

ありがとうございました。

第四話

どうも、緋音です。

例の幼女（長谷川千雨ちゃんという名前らしいです）がお友達になってから、一年が経ちました。

あの式の後は、私が男だとわかると突然キレだしたことを除けば、順調に仲良くなれました。

我が心友とも問題なく仲良くなれましたが、どうも他の子達とは話が合わず、三人組で行動することが多かったです。

私の体が弱いため、あまり激しい遊びができず、屋内で遊ぶことが多かったですが、思い返せばなかなか濃い出来事が多いですねぇ。

私の格好に対するいじめが起きたり（翌日いきなり震えながら謝られたので驚きました）、私と千雨ちゃんのコスプレ写真撮影会が親主催で開かれたり（心友はいち早く逃げ出しました）、千雨ちゃんと麻帆良は変だねと話し合ったり（隣で聞いていた心友が冷汗を流していた）、心友がバレンタインで何人かの女の子にチョコをもらっているのをニヤニヤしながら眺めたり、校内ランキングの美少女部門（低学年）の上位に私の名前があると聞いて落ち込んだり、色々ありました。

残念ながら、今の体では外で走り回れなかったので、大人しく過ごしていることが多かったですね。

そうでなくても、あの子供達のパワーにはついていけなかったでしょうが・・・

サングラスやＵＶ対策なしに外に引っ張り出されそうになった時は、泣きそうになりました・・・・・オソトコワイオヒサマコワイ・・・・・

さらに一、二年が経過したあるいい天気（曇り）の昼下がり、私はふと言葉にしました。

そうだ、図書館島に行こう。

その言葉を聞いた二人の反応は、

「あそこか～、なんか凄いらしいからな。行ってみようぜ！」

と心友が乗ってきたのに対し、

「罠とかあるんだろ？危ないから止めないか？」

千雨ちゃんはあまり乗り気ではないようです。嫌そうです。

話によると地上部分は安全ならしいので、ちょっと説得すれば地下には絶対に行かないという約束の下、放課後に図書館島散策ツアーに行くことが決定しました。

何か新しい出会いがあるといいですね～♪

第四話（後書き）

ありがとうございました。

番外編１（前書き）

入学式の後の出来事です。

番外編1

・入学式の後

「千雨ちゃ～ん、お待たせしました。　あ、こいつは私の心友の宮部（みやべ）　翔（しょう）です。」

「俺のことは翔って呼んでくれたらいいから、よろしく。」

「（親友ねぇ）初めまして、長谷川千雨です。男女で仲いいんだな？」

男の子2人はにこやかに挨拶をし、女の子は少し愛想に欠けるが挨拶を返す。

「あはは～、何言ってんですか千雨ちゃん。私、男ですよ？」

そういうと千雨ちゃんの顔が引き攣り、紹介された方の男の子も笑顔を引き攣らせ、「ああ、またか。」みたいな顔をした。

「や、やっと普通に（髪白くて、目が赤いけど）仲良くなれそうなやつに会えたかもと思ったのに・・・・」

「？　千雨ちゃん？」

男の娘がどうしたのかと近づくが、女の子はビンタをかましながら叫ぶ。

「お前もかー！」

「（バチーン！）へぶっ・・・・ち、千雨ちゃん？　ちょっ、千雨ちゃーん！」

女の子は泣きながらどこかへと走って行き、男の娘は追いかける。
男の子はいろんな意味で取り残されてポツーンと立っていた・・・・・

ちなみに、仲良く手をつないで戻ってきたときの女の子が嬉恥ずかしそうにしていたのを見た男の子が、心友をぶん殴ったのは仕方のないことだろう・・・・

第五話（前書き）

作者は原作を知らないので、捏造しまくるでしょうが勘弁してください。

第五話

図書館島。

それは麻帆良湖に浮かぶ（浮かんでないよね？）世界最大規模の巨大図書館。
２度の大戦の戦火をさけるため、世界中から様々な貴重な本が集められてできたそうです。
蔵書の増加に伴い地下に向かって増改築が繰り返されたために現在では全貌を知るものはいらっしゃらないそうで、その実態を調査する中・高・大合同サークル「図書館探検部」なる部（地下に罠を仕掛けていることを考えると、どえらいハードな部活動ですね？逆に迷惑なのでは？）も存在していると聞きました。
（ｗｉｋｉ参照）

・・・なんでやねん。

おおっと、すみません。あまりの出鱈目さに意識が飛んじゃってましたよ。

○爆とか落とされるような国になんで世界中の貴重な本が集まるんでしょーねー？

となりで千雨ちゃんも一緒に突っ込んでますよ！（心友はなんかハラハラしてますね？）

地上部分は安全らしい（というか図書館に安全じゃないところがあるのがツッコミどころですよね？）ので、見て回りましょう。

ほらほら、千雨ちゃんもしょーくんも行きますよー！

いやー、これだけ広くて高い建物にあるだけでもものすごい蔵書量ですね？

迷子とかでないのかな？

どうせだから皆で手を繋いでいきますか？

「いや、俺はいいよ。千雨ちゃんと繋いだら？」

「ばっ、馬鹿言うんじゃねぇよ！手なんか繋がなくても大丈夫だよ！」

あら？そうですか？残念ですね。

最近片手（日傘を持たない方）がさみしいな～、と思っていると、

おどおどした様子が庇護欲をそそる、前髪で目が隠れた少女を発見しました。

おや、これはいけませんね。

紳士（笑）たるもの困った女性には手を差し伸べねば！

ということで、さっそくアプローチ開始です！

「（また新しいフラグか？）」

「（むっ・・・。いや待て、そう、緋音は人助けが好きな奴なんだ。だから問題ない。あれ？じゃあ私も・・・・）」

後ろの呆れと怒りと悲しそうな空気はスルーして、

こんにちは御嬢さん。何かお困りですか？私でよければ喜んで手を貸しますよ～。

私に気づいた少女はビクッと小動物的反応をしながらもこちらに向き、「ひぅっ」っと鳴いて一歩下がりました。

あれ？おかしいな？

目から何か熱いモノがでてきそうです。私何かしましたか？その反応は悲しくなるんですけど・・・・（少しいじめたくなったのは気のせいです！）

「え・・・っあ、あの、すみません。その、ちょっと（サングラスとか白い髪とかに）びっくりして、あ、その・・・」

・・・ぐはっ

クッ、こんなところでこんなモノ（皆で協力して守っていくべきモノ）に出会うとは・・・

人生何があるか分かりませんね。

後ろの怖い視線には気づきません。ええ、ス「おい」ルー不可能でした。

「結局どうだったんだ？その子迷子なのか？」（しょーくんナイス！）

今聞くところですよ～。

えぇ、だから千雨ちゃん、その固く握った拳をひらいてください。

「なるほど、ビンタがいいのか。」

断定しないで！まず叩くことを選ｔ「あの～・・・」あ、放置してすみません。

それであなたはど・・・

我ながらいい反応ができたと思います。

私たちを横切った台車が倒れてきて、その上に積まれていた段ボールの山がこちらに倒れてきたんです。（反対側からふざけて走っていた男子がぶつかったからだそうです。ちなみにその子は無傷）

近くにいた千雨ちゃんをしょーくんの方に突き飛ばし、ついで迷子（？）の女の子をを反対方向に勢いよく突き飛ばし、逃げ遅れた私は腕で頭を庇うようにして衝撃に備えました。

・・・（フワッ）・・・ドサドサドサっと物音がして、待つこと数秒・・・・あれ？痛くない？

目を開けてみれば迷子（？）の子は目を回し、千雨ちゃんにこちらを見えないように抱いて距離をとっていたしょーくんは目を見開いて驚愕の表情を浮かべ、台車を押していた人は目を覆っており、知らない男の子が台車のそばで転んで痛そうにしていました。

あれ？私って運がよかったんだなー、っと思ってしょーくんの方を向いたら、

「千雨ちゃん、悪いけどあの子見ていてもらっていいかな？ちょっと緋音保健室につれていくから。ほら、いくぞ！」

「わ、わかった。」

冷静なようで焦りながら、しょーくんは私たちに指示をだし、私の腕をつかんで駆け出しました。

ちょ、しょーくんストップ、ストーップ！携帯取り出して話始めん

な！せ、せめて傘！傘だけでもないとわたｓ・・・ぎゃ――――！！！！！！！！

・・・・・もう少しで私はＵＶ対策なしで晴れてきた外に連れ出されるところでした・・・・・オソトコワイオヒサマコワイ（がくがくぶるぶる）・・・・・・

「・・・あ、師匠ですか？問題が発生したので至急相談したいんですが・・・・」

第五話（後書き）

ありがとうございました。

第六話（前書き）

ちょっと無理やりな感じですが、独自路線でいってみようと考えています。
主人公はちゃっかりチートでした。

第六話

「ふぉっふぉっふぉ、君が魔法を使ったからじゃよ。」

麻帆良学園本校女子中等学校の学園長室、私はそこにいます。

私の他には、目の前に学園長(ぬらりひょん)が机に座っており、隣でしょーくんの師匠だとかいう人が報告して、私の側にこちらをちらちら見ているしょーくんがいます。

あの後、しょーくん（あの後、肉体言語でＯＨＡＮＡＳＨＩしました）の師匠（高校の先生らしいです）と合流し、この場所まで連れられてこられました。

悪いことなんてしてないのに、悪いことしたみたいでびくびくしていましたが、とりあえず聞いてみました。

あの～、なんで私はここに連れてこられたんですか？

笑顔です。ひきっつっているかもしれませんがとりあえず笑顔で尋ねました。

それに対する返答が、最初の言葉でした。

本来なら、この人頭大丈夫かな？とか思うんでしょうが、私は自分でも理解できていない不思議な体験をとっくの昔に済ませていましたし、この土地が変なのはわかっていたので、すんなりと受け入れました。

ええ、学園長（ぬらりひょん）がいうんだから説得力ありますよね！

「なぜか釈然とせんが、とりあえず魔法が実在することは理解してくれたかの？」

理解しましたよー。バッチリです。妖怪が魔法ってどうよ？とも思わないですが、現状把握です。

でも、できれば実際に見てみたいんですけど？

「じゃあ俺が見せるよ。　プラクテ　ビギ・ナル　“火よ灯れ（アールデスカット）”」

〈ボッ〉

おお～、火がでました！

夢がありますねー、ファンタジーですねー。しょーくんも使えるんですね。いいな～。

「ふぉっふぉっふぉ、魔法は秘匿されており、本来なら一般人にばれたら黙っていてもらうか、記憶を消させてもらっているんじゃが・・・」

なんか物騒な言葉が聞こえましたけど・・・ああ、私が使ったから問題になったんですね？

・・・使ったんですか？自分じゃよくわからないんですけど？

「お主の隣にいる宮部くんが、お主が風の魔法らしきものを使ったのをちゃんと見たそうじゃ。」

そうなんですか？

「ああ、緋音に魔力があるのは分かってたけど、魔法を知ってるようでもないからびっくりしたよ。」

ふ～ん。そんな簡単に使えるもんですかね？さっき杖もって呪文唱えてましたけど？

「そこじゃ。」

へ？

「儂からみてもお主はそんなに魔法の才能があるように見えない上に、杖のような触媒をもっているというわけでもない。なぜじゃ？」

いやいや、知らないですよ？プロにわからないものをどう説明しろと？

魔法、魔法ね？風がでたんですよね？どうやって？う～ん？

風よ！な～んちゃ・・・

その日、帰宅中の生徒たちは学園長室の全窓がぶっ飛んだのを目撃した。

第六話（後書き）

ありがとうございました。

第七話（前書き）

魔法の解釈が間違っていたらすみません。

第七話

居づらいです・・・・ものすごく居づらいです。

部屋の中はぐちゃぐちゃで、机や椅子はひっくり返り、壁に傷がつき、窓は大破。そして私以外の皆さんの恰好はよれよれで、不機嫌そうな表情を隠そうとしていますが、怒りマークがはっきり見えます。

「それで・・・どうやら君は風を操れるようじゃの？」

いえいえそんなことできるわけないじゃないですか！？ちょっと言ってみただけですよ。言っただけなんですよ！

「じゃが、この現状をどう説明するのかね？」

「そうだぞ！さっきものすごい風だしたじゃねぇか！？壁に頭ぶつけてコブできたんだぞ！」

ちょ、タンマ、そんなに揺すらないで下さいよ。と、とりあえず落ち着きましょう！

えーっと、さっきの言葉は言わない方がいいですかね？

「そうじゃな・・・（言霊？いや、それじゃと今まで何もなかったというのはありえん。無詠唱魔法だったとしても、あれだけの風を起こした後で彼の魔力が減った様子はないしのう？ふむ？）」

うわー、どうしましょ？向こうで話し始めちゃいました。

私っていつ爆発するかわからない爆弾みたいですね？あははは・・・・

うーん、それにしても部屋酷いですね？こういうのをパパッと魔法で直せないんでしょうか？

しょーくん？お掃除とか物のを元通りにする魔法とかないんですか？

「いや？あるとしても俺はしらねぇ。だいたい俺の習っている一般的な魔法ってのは、杖とかの触媒を通して魔力を周りの精霊に渡して、詠唱することで魔法を発動させてるんだよ。火とか水と光とか。」

精霊がいるんですか？

ふむ？わざわざそんなことしなくても頼めばいいんじゃないんです

か？

例えば、精霊さんお水くださいっt・・・・・・・・・

放課後遅くに帰宅しようとしていた学生たちは、学園長室の窓から大量の水が流れ出るのを目撃した。

第七話（後書き）

ありがとうございました。

第八話（前書き）

相変わらず短いですが、とりあえず載せます。

第八話

放課後の学園長室、そこはもはや見る影もなくなりつつあり、グシャグシャのビチョビチョでした。

空気が再び悪くなり、心なしか先ほどより大きな怒りマークがみえます。

「・・・・・・・・ほう、精霊にお願いしたとな？」

はい、そうなんです・・・出来心だったんです・・・

だから、その・・・えっと・・・

・・・許して？

（ゴン！）あでっ！？　しょーくん、痛いですよ？

「反省しろ。」

ごめんなさい！

「学園長、もしかしたら白峰君は精霊に好かれているのではないでしょうか？それもとてつもなく。」

「うむ。そう考えた方がいいかもしれんの。（しかし、本当にどうしようかの？あやつに知られると面倒じゃし・・・・いや、いっそ押し付けるのもありかもしれん。）」

「とりあえず、今日はいったん帰しましょう。風邪を引かせても問題ですし・・・なんでしたら、翔と一緒に私が様子をみますよ？」

え？　い、いいんですか？　私、迷惑ばかりかけましたけど？

そして学園長！　何やら妙なこと考えていませんか！？

「はは、確かに大人げなく怒ったりもしたけど・・・困っている生徒を助けるのが仕事柄だからね。気にしないでいいよ。」

「ま、お前なら俺もいいよ。ただし、もうちょっと気をつけろよ。」

あ、ありがとうございます！

しょーくんもありがとー！さすが我が心友だね！

「ふぉっふぉっふぉ、君たちは早く帰りなさい。あぁ、保健室に寄ってタオルを借りるといい。白峰君、くれぐれも魔法とかについて誰かに話さないようにの？」

はい、ありがとうございます。それじゃあ失礼します。

「失礼します。」

そうして、やっと私たちは帰宅しました。

翌日、心配した千雨ちゃんに怒られました・・・

「聞いてんのか！」

はい！聞いてます！

第八話（後書き）

ありがとうございました。

第九話

どうにかこうにか千雨ちゃんを落ち着かせ、私は気づきました。

そう、千雨ちゃんもこの土地がおかしいことに気づいていて、周りのみんなと意見が衝突しがちだったんですよね。

私たちがいたから結構ましになりましたけど、独りだったら人間不信になっていたでしょうね？

うわ～、皆から嘘吐きとか言われると思うとぞっとしますね・・・

しかも自分も周りも子供ですからね・・・良くも悪くも

気づいてしまったからには、その不安を取り除いてあげたい。

子供を守るのは大人（笑）の役目ですからね！

とりあえず、教えるかどうかをししょー（しょーくんの師匠――森里（もり さと）景一（けいいち）先生、バイクが趣味――のこと。私もそう呼ぶことにしました。）に相談することにしました。

ししょー、実は私の友達に昔から麻帆良が変だって気づいてる子が一人いるんですけど、魔法のこと話しちゃだめですか？

「何だって？　・・・ああ、翔が話してた子だね？　翔？　その子に認識阻害はやっぱり効いていないのかい？」

「はい。　前にも言いましたが千雨には効果がないみたいでした。」

あら、先にそういう話してたんですね？

「うん。　とりあえず、君たちがいれば大丈夫かな、と思って黙っててもらったんだ。　下手に教えると色々と不味いからね。」

出来れば教えてあげたいんですけど？

千雨ちゃんは常識がしっかりしてる分、時々辛そうにしていましたから・・・

「あ～、ごめんね。　気が回らなくて。　君は大丈夫だったのかい？」

「そうだよな。　お前大丈夫そうだから、千雨も大丈夫かと思ってたぜ。」

む！　しょーくん、それはいけません！　紳士（笑）たるもの女の子を大事にしないと！

「いや、千雨が弱み見せんのは大抵お前にだから。　それに俺は男女平等だ。」

「ははははっ。　うん、教えて大丈夫だよ。　学園長には俺から伝えておくから、その子の不安を解消してきてあげて。」

はい！　ありがとうございます！　では早速・・・

そして、千雨ちゃんに電話をかけようとすると、

「明日にしたらどうだ？　今からじゃ遅くなるだろうし・・・それに、お前は早くその体質？をどうにかしないとな。」

ぐっ、そうでした。　昨日は大参事でしたもんね・・・

「それじゃ、さっそく試していこうかな。　まずは魔力を操作してみようか。　本当なら、杖をもって初心者呪文を唱えて練習していくんだけど。　君の場合、魔法使いになるのが目的じゃないし、下手に呪文唱えると何が起きるかわからないもんね？」

す、すみません。

しょーくん、苦笑いしないでください、距離を取らないでください。

「いや、昨日お前のそばにいたから余計に、な？」

すみませんでした！

まあ、ぼちぼち始めましょう。　こういうのは切り替えが大事です！

魔力～、魔力～っと。

目を閉じて、静める、鎮める、沈める。

意識を体の内側に。

周りの音が消えていき、心臓の音が聞こえ、血の巡りを感じる。

体の中心ではなく、奥へ、奥へと。

意識を、感覚を這わせて、広げて、探っていく。

・・・ある。

力を感じる。

優しく、恐ろしく、温かく、冷たい、力を感じる。

自分に、大気に、大地に、生命に。

それに触れる。

そしてそれを・・・・

「・・・ん・・・・くん・・・・・・白峰君！」「・・・・・ね・・・・・かね・・・緋音！」

うおっ！　ど、どうしたんですか？　何か問題が！？

「いや、何だか不味い雰囲気だったんで止めさせてもらった。」

「そうそう、お前何しようとしたんだ？　すげー寒気がしたぜ・・・こう、ヤバイって！」

いや、魔力を操ろうにも感覚がわからなかったんで、集中してたんです。　それで、自分だけじゃなくて、この空気中とか大地にある何かがそれだろうなと思って、こう、集めようと・・・

「か、感じただけじゃなくて？」

ええ、あとちょっとでガッと集めて取り込められそうでしたよ？

あれ？　何でそんな理解不能なものを見る目で私を見るんですか？　普通じゃないんですか？

ちょっと！　ししょー、考え込まないで！

「白峰君、君は・・・」

はい！　何でしょうか！？

「君は、魔法使いになるべきかもしれない。」

・・・え？

第九話（後書き）

ありがとうございました。

第十話

翌日、千雨ちゃんに放課後の時間を空けてもらい、魔法について話をすることにしました。

千雨ちゃん、実は魔法は実在したんですよ！

「あ・・・緋音、頭でも打ったのか？　それとも早い中二病か？
大丈夫、大丈夫だから。　私はちゃんと受け止めてあげるから。
安心して・・・」

あれ？　心配してくれるのはうれしいんですけど釈然としませんね？

「千雨はとりあえず落ち着いて。　緋音は端折りすぎ。　あのな？
まず・・・」

おっと私は放置ですか・・・

「・・・ということで、お前はちゃんと常識持った一般人なんだよ。」

「そう・・・か。　・・・緋音たちは魔法のことは最初から知ってたのか？　（私だけ仲間外れなのかな・・・？）」

「あ～・・・それなんだが、図書館島に行った時こいつ段ボールにつぶされかけただろ？　あの時に緋音が魔法使ったみたいだったか

ら連れ出して、その後俺が師匠たちと会って説明したんだよ。　だからそれまでこいつはただの一般人だったよ。」

「そ・・・そうか。（ホッ）　翔は違うんだな？」

「ああ、俺は最初から魔法を知ってたよ。　おい、緋音。　話終わったぞ。」

（ボーッ）おぉう！？　終わりましたか。

それじゃあどうしましょ？　皆で遊びにいきますか？

「そうだな。　千雨は？」

「ん、大丈夫だ。　どこ行く？」

そうして、私たちは遊びに出掛けました。　千雨ちゃんが元気になったようで何よりです♪

そして、私は昨日の会話を思い出しました。

え？　魔法使いにですか？

「うん。　正確には自分の身を守るだけの力を持った方がいい。君は狙われやすいだろうからね。　さっきのことといい、精霊に好かれているだろうという君の体質も。」

狙われるんですか？　黙っていればわからないんじゃ？

「いや、わかる人にはわかるだろう。　実際、学園長には君が精霊に好かれているだろうというのがバレてるし、他にも分かりそうな人物がいる。　学園長は甘いところもあるけど、腹黒いからね。使えるモノは使おうとするだろう。」

ハァ・・・　何に使うんですか？

「日本有数の霊地であるこの土地そのものや、多くの貴重な魔道書が保管された図書館島、あの世界樹『蟠桃』などが狙われていて、襲撃者が絶えず侵入を図ろうとしているんだ。　それを防ぐために、主に立派な魔法使い（マギステル・マギ）、所謂正義の魔法使いを目指している魔法先生や魔法生徒といった魔法使い達が夜に警備員として防衛しているんだ。　本国から派遣もしてもらっているんだけどまだまだ人手不足で、有能な人材は常に求められているんだ。」

・・・すみません。正直に言わせてもらうと、その話を聞くだけで色々突っ込みたいんですけど・・・

「ん？　何だい？」

え～っと、じゃあ、なぜ襲撃するところに一般人が生活する場をつ

くったんですか？　でっかい公園つきの博物館とか美術館とか建てて夜だけでも一般人入らないようにしたらよかったんじゃないですか？

「はははは、そうだね。　守るだけならそれでもっとやりやすかったかもね。　でも、おそらくは他の、そう例えば魔法を習う子供達がいてもおかしくない環境をつくろうとしたんだろうね？」

ああ、なるほど。　じゃあ本国ってどこなんですか？

「ああ、分からないよね？　この世界とは違う魔法世界、まあ異世界がそんざいして、そこにあるメガロメセンブリアって国がこの麻帆良の上部組織なんだよ。　まあ、上司と下っ端の関係といえばわかりやすいかな？」

あれ～？　疑問がさらに増加したんですけど！？　これ、いつまでも疑問が尽きないような・・・

えっと、なんで先生や生徒、特に生徒が警備してるんですか？

「日常で正体を隠していたり、人手不足っていうのもあるだろうけど、正義の魔法使いとなるための試練みたいな感じかな？」

だめだ！　私には理解できない世界だ！

突っ込んじゃだめだ、なんで朝昼働いて夜も働いてんだよ、とか突っ込んじゃだめだ！　いつまでも終わらない・・・

え～・・・あ～・・・じゃ、じゃあ、最後に、立派な魔法使い、正義の魔法使いってなんですか？

「それは本国に実力の認められた魔法使いが名乗れるようになるんだ。　世のため、人のために陰ながらその力を使う、魔法世界で最も尊敬される仕事の一つだよ。　こういうのは誰かの許可がいるものじゃないとは思っているんだけどね・・・・　正義正義ってうるさい人が多いから気を付けた方がいいよ？　絡まれるから。」

し、ししょーは他の人とは考え方が違うんですね？

「うん。　俺はこの世界で育ったし、流れで魔法使いになったところがあるからね。　・・・ガキかよって思っちゃうんだよねぇ～。」

こ、こわっ！

はぁ・・・ま、先のことは置いといて・・・自分のことを何とかしましょう。

今のままだとまだ爆弾みたいなもんですもんね・・・

「お～い。　どうした？」

なんでもないですよ～。

第十話（後書き）

ありがとうございました。

番外編２（前書き）

千雨に魔法のことを話して数日後の帰り道での話です。

番外編2

・ある日の下校中

「そういえばしょーくん。　魔法が実在するとか教わりましたけど、何で私達だけ皆と違って一般常識を持っていたんですか？」

「「は？」」

緋音がふと思い出したように翔に聞くと、翔だけでなく、千雨まで「何言ってんだこいつ」という反応を返した。

「な、なんですか？　その反応は？」

「いや、私より先に魔法のこと知っときながら何で知らないんだよ？」

「そうだ、千雨に説明したときも言っただろうが。」

「聞いてませんでした。」

「（怒）・・・はぁ、ダメだこいつ。」

「何で気にならなかったんだよ？」

「だから、今気づいたんじゃないですか。」

「「遅いわ！」」

ドンッ！と二人の同時ツッコミが緋音に炸裂する。

「いいか。　麻帆良には結界が張ってあるんだよ。　効果は魔物の弱体化と強力な認識阻害だ。　この認識阻害が一般人に危険を危険と思わせなかったり、不思議なことも不思議に思わなくさせてるんだよ。」

「え～、危なくないですか、それ？」

「やっぱりそうだよな。　緋音の影響かあの時はあんまり気にしなかったけど（一度に大量に教えられたしな）。」

「あ～、でもそれがないとあの世界樹とか図書館島とかの異常さが表に出て不味いんだよ。　魔法使いの仕事にも影響するかｒ・・・」

横断歩道を渡ろうとすると、車が一台こちらに突っ込んできた。どうやら信号が変わったのにスピードを上げて無理やり突っ込んできたようだ。

それに気づいた翔が二人をひっつかんで後ろへと跳ぶ。

車は自分たちのいたところを少し過ぎてから止まった。

そして、ドライバーが下りてきて言う、

「おーい、嬢ちゃんたち、大丈夫か。　ごめん、ごめん。」

「「な・・・！」」

千雨と翔が憤るが、緋音が二人を止める。

「っ・・・緋音！」

「・・・・・・」

「じゃあ、嬢ちゃんたちも気をつけろよ。」

そして、ドライバーは再び車を発車させ、去っていく。

「「緋音！　何d・・・」」

千雨と翔が緋音に詰め寄るが、緋音の様子に言葉が詰まる。

彼は歯を食いしばり、己の感情が高ぶるのを必死で耐えていた。怒りで精霊を暴走させないためか、または相手が先ほど話していた認識阻害の影響を受けているからと納得させようとしているためか、身を震わせて耐えていた。

そうやってしばらく沈黙が続き、

「ふぅ・・・帰りましょうか？」

「（緋音・・・）そうだな、帰るか。」

「（はぁ、こいつは何で昔からこう・・・）了解。　またどこかに遊びに行こうぜ。」

そうして彼らはそれぞれの家へと帰って行った。

「やっぱり認識阻害っていりませんね？」
「「うん。」」

番外編2（後書き）

ありがとうございました。

第十一話（前書き）

再び時間が跳びました。

第十一話

桜が咲き誇り、春の暖かな風が眠気を誘う、よく晴れた日のことです。

私たちは順調に成長し、背も伸びました。

私は、相変わらず日に当たることができなかったので、肌は白くて無駄にキメ細やか。　筋肉がつきにくい上に、そんなにハードな運動はしていないので体は細いです。

髪も伸び、邪魔になって切ろうとしますが、両親（「せっかくキレイなんだから！」「そうだぞ、おもs・・・かわいいのに！」）＋千雨ちゃん（「ダメだ！もったいないだろ！」）の妨害に遭い、伸ばしっぱなしで、女の子見たいです。

外を歩くと、「かわいい」「キレイ」「美少女」「ま、まさか男の娘！？」とか言われるのにももう慣れました。

ただ、女性の（妬みとかの）視線には慣れません・・・

千雨ちゃんに魔法のことを話してからも、色々と大変でした。

図書館島で迷子（？）になってた子が私にお礼を言いたいとのことで、会いに行けば、かわいい女の子の知り合いが増えました。

こんにちはー！　あの時はお互い災難でしたね？

ごめんなさい、咄嗟に突き飛ばしちゃって。　大丈夫でしたか？

あ、よかったです。　お礼？

いいですよ、女の子を守るのは男の務め・・・え？　ああ、私これでも男なんですよ。

どうしました？　あのだい・・・何で気絶！？

・・・かわいい。

はっ！　ち、千雨ちゃん落ち着いて！　落ち着いて話し合いましょう？

いやＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩって、それ肉体言語では！？

しょーくん、そこの御嬢さんたち、た、助けｔ・・・・・

また、ある時は、忘れられない思い出ができました。

いったい何ですか？　撮影会？

・・・前もしましたよね。

記念になる？　そりゃ忘れられそうにありませんがね！？

くっ、千雨ちゃんは？

だめだ、こっちにフリフリの服もって迫ってくる！

こうなったらしょーくんだけでも・・・逃げやがったなあんにゃろう！

つ、捕まってたまるもんですかー！

魔法、というより魔力操作の訓練では新たな発見ができました。

えっと、自分の中にある魔力だけを動かして・・・

こう？　こうですかね？

あ、自分に魔力を流して強化できるんですか？

じゃあ、目に流れるように直結してみると遠くの物が・・・

ぎゃー！　め、目がぁあああ！！

サングラスかけてるのにまぶしいです！　何か小さな光みたいなのが大量に見えます！

あ、これが精霊ですかね？

魔眼？

何それ怖い。

他にも遠出してハプニングが起きたり、自身の能力を抑えるのに四苦八苦したり、学園長が私のことを期待していたり、新しい出会いがあったり、千雨ちゃんが暴走したり、心友の特訓につきあったりとドタバタした毎日でした。

今日は中学校の入学式です。

今日から男女別に分かれた学校で、入寮して過ごすこととなります。
お母さんは「早く帰ってきてね。」と心配し、お父さんは「気をつけろよ、特に周りに襲われないようにな？」と笑いながら見送ってくれました。
もちろんお父さんにはお母さんからの鉄拳制裁が下されました。
ただ、その時の「シャレにならないこと言うんじゃありません！」って言うことは、お母さんも理解してるんですね・・・
周りを見れば男男男、女性は先生の中にちらほらいますがほとんどが男のそんな集団の中に私――サングラスをかけ、日傘を常備しているアルビノの男の娘――はいます。

メッッッチャ見られてます。
他の小学校から来た子や先輩も大勢いるので物珍しいのでしょう。
　ジロジロこちらを見てきます。

怖い、怖いです！　何が怖いって一部が息を荒げてこっちを血走った目で見てくるんですよ！？
しょ、しょーくん、ヘルプ！　ヘルプ！
逃げないで！　私を置いていかないでー！

離れて歩こうとする我が心友の腕を片手で抱きつき、逃がすまいとすれば、周りの視線に黒いモノが混じって重圧が増えました。

「は、離せ！　今の状況でそれはヤバイ！」

ダメですー。　逃がしませんー。　死なばもろともですー。

はぁ、癒しが欲しい・・・

第十一話（後書き）

ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1159y/

それなりに上手くいっていた人生でした。

2011年11月5日03時08分発行